

[報告] 第5回歴史地震研究会功績賞を戴いて

神戸大学名誉教授 石橋 克彦*

Acknowledgment for the 5th Distinguished Contribution Award of the Society of Historical Earthquake Studies

Katsuhiko ISHIBASHI

Emeritus Professor, Kobe University

1. はじめに

このたびは、第5回歴史地震研究会功績賞を戴きまして、誠に有難うございました。私は、1984年に宇佐美龍夫先生が最初の歴史地震研究会を開いてくださったときから暫くは熱心に研究会に参加していましたが、その後欠席がちの期間がかなり続き、会務に汗を流したわけでもありませんので、このような賞を戴くのはたいへん恐縮に存じております。

2019年9月22日の第36回歴史地震研究会(徳島大会)の総会の前に松浦律子会長から戴いた賞状には、「あなたは『[古代・中世]地震・噴火史料データベース』の構築を主導され史料校訂の推進とその共有を図るとともに史料地震学を駆使して来たるべき南海トラフの巨大地震に対する警鐘を鳴らしてこられました」と書いてありますが、これらはもちろん私一人ですることではなく、多くの方々とともに取り組んできたにすぎません。その意味でも誠に面映ゆく思います。

同日の懇親会に先だってお礼の挨拶の時間をいただきましたが、たぶん会場の都合で、集合写真を撮ったままの非常に窮屈な姿勢で皆様がお聴きくださり、それがとても気になって、ご指導・ご助力をいただいた方々や一緒に仕事した仲間などへの言及と謝辞をとぼしてしまいました。それがとても気になっておりましたので、長年お世話になった方々へのお礼を込めて、私のやってきたことを振り返ってみたいと思います。

2. 歴史地震研究を始めた頃

私は、東大理学部地震学研究室の大学院生と助手のときには、極微小地震($M1$ 未満)の臨時観測をして地震活動の特性(普遍的法則と地域的特性の両方)を考える研究をしていましたが、恩師の浅田敏先生(1919-2003;高感度地震計と微小地震研究の開拓者)が

「地震の住民登録」と仰っていたのに感化されて、大地震はテクトニックな理由があつて特定の場所に「住んで」いて「定期的に暴れる」という感覚を養いました。それで地震テクトニクスに関心を深め、とくに関東・東海地方の大地震発生機構を具体的に考えるようになりました。それには過去の地震活動を知ることが必須になるわけで、歴史地震への関心を強めていきました(自分では「古い地震の観測」と言っていました)。

最初は1923年関東地震前後の関東地方の被害地震(これらも今や歴史地震)の震源再決定に取り組みましたが、1976年の「駿河湾地震説」(東海地震説)をきっかけに、近世以前に深入りするようになりました。当時駿河湾はプレート衝突帯で大地震は起こらないとされ、研究・観測も防災も「空白域」でしたが、私は山梨県東部地震群のテクトニクスの研究から定説に疑問を抱き、1854年安政東海地震の震源域は駿河湾奥まで達していただろうと考えました。偶然手許にあった史料に、駿河湾奥西岸の薩埵(さつた)峠の下の浜がこの地震で隆起したことが書かれており(付近の地下に震源断層があつたことを意味する)、私の予想が裏付けられ、駿河湾地震説に繋がりました。

それ以来、武者金吉『増訂大日本地震史料』などをよく見るようになりましたが、注目する史料の素性(誰が、いつ、どこで、いかなる状況・目的で書いたのか、それがいかに伝存したのか)が非常に気になりました。(それを気にしたことで、1605年慶長津波被災地の三崎が定説の三浦三崎ではなく、土佐清水市の三崎であるとわかったり、複数の「fake地震」を明らかにできたりしました)

歴史研究者の助力が必要不可欠ということも早くから頭にありました。いま読むと赤面・冷や汗ものですが、一面識もなかった文学部国史研究室の若手助手(現在近世史の大家)を通じて、中世史専攻の若手研究者

* 神戸市在住
電子メール: ishi@kobe-u.ac.jp

に「明応大地震の史料分析についての呼びかけ」(1977年2月3日付)を送ったりもしました。これはまさに「古文書」で、中味は忘れていましたが、小文を書くにあたって「発掘」したところ、我ながらよいことが書いてあります。まず「(現状は)地震の記事だけを抜き出して羅列したものを地震研究者がいわば盲目的に(時には御都合主義的に)用いている場合がほとんどで、歴史的な史料批判が全くと言ってよいほどなされていない」「この分野ではどうしても、歴史研究者と地震研究者の緊密な共同作業が必要不可欠」「史料地震学とでも言うべき学際的領域が市民権を得て、研究活動の場が保障されるべき」などと記し、それは当然望むべくもないので、まずは1498年明応地震について若い力で学際的作業を実行し、具体的成果を世に問いたいと書いています。具体的には、同地震について、時代概説、史料残存状況、地震史料の解題、各地震史料(校訂した原文・訓み下し文・現代語訳・語注・歴史学コメント・地震学コメント)、歴史的解説、地震学的解説、地名・事項索引を並べた報告書を作りたいとしています(少し作業をしていただきましたが、私が77年11月に旧建設省建築研究所に転出して有耶無耶にしてしまったらしく、申し訳なく思い、猛省しています)。結局、この考え方で現在までやってきたこととなります。

3. 地震史料の全文データベース化

地震史料集が玉石混交であることが気になっていたわけですが、1984年の第1回歴史地震研究会で、歴史学と地震学の最新の成果を動員した地震史料集の校訂を考えてもよいのではないかと述べました。石橋(1985)では、「いずれは、日本語処理のコンピュータによる地震史料データベースの構築という(たぶん国家的な)事業にまで話は発展しそう」と書きました。

歴史地震研究のレビューをした石橋(1987)で、あらためて2項目の提案をしました。第1は、歴史研究者も正規のスタッフとして含むような歴史地震研究拠点の新設、第2は、パソコンを用いCD-ROMを媒体とした既刊地震史料集の全文データベース化です。

なお、その後の地震史料集電子化の議論では、本が入手困難なことや使い勝手が悪いことが強調されがちでしたが、私のなかでは玉石混淆の地震史料集の校訂のツールという面も重要でした。その意味で、歴史研究者との共同作業が必須と考えていました。

私の提案の第1点は相手にされませんでした。後述の2002年のワークショップで、イタリアのIstituto Nazionale di Geofisica e Vulcanologia (INGV; 国立地球

物理学火山学研究所)のミラノ支所で女性歴史研究者のPaola Albiniさんが歴史地震学ユニットの責任者として活躍しており、私の提案が実現していることを知りました。日本でようやく東京大学地震研究所・史料編纂所による地震火山史料連携研究機構が発足したのは、実に30年後の2017年度です。

第2点については関係者のかなりの関心と賛同があり、1987年9月に国立防災科学技術センター(現防災科学技術研究所)で地震史料データベース化プロジェクトが企画されました。私も加わった委員会が作られ、歴史地震研究会の一環として討論会(88年2月)が開催されたりして、地震史料集の近世初期の部分がデータ化され、吉井敏尅さん(東大地震研)によって検索ソフトも作られて、学会発表もされました。しかし、入力外注の予算が続かなかつたことや、岩崎伸一さん(2008年11月6日に55歳で逝去)の個人的努力に負う面が強かったことなどから、90年代初期にプロジェクトは中断してしまいました。

その3、4年後、地震史料データベース化ではありませんが、静岡大の小山真人さん(火山地質学)を中心とした中堅火山学者から刺激的な動きが起きました。小山さんは、1993年頃から日本の歴史噴火の研究が杜撰であることに愕然とし、さらに、きちんとしていると思っていた歴史地震学にも問題が多いことに気付いたそうです。94年10月には小山さん・早川由紀夫さん(群馬大)・井村隆介さん(地質調査所、現在鹿児島大)らが中心になって日本火山学会のなかに「史料にもとづく火山の噴火史研究ワーキンググループ」(代表:小山・井村・石橋)が発足し、3年間活発に活動しました。私は、95年1月の阪神・淡路大震災や96年3月の神戸大への異動などでさぼってしまいましたが、一時は噴火史料データベースが先にできるのではないかとこの観もありました。

1997年2月には、歴史時代・先史時代の地震・噴火に関する諸問題(人文・社会科学も含む)を議論するメーリングリストとして、早川・小山さんによってmushaが開設されました(それが現在も続いている)。中世史研究者でパソコン活用にも詳しい田良島哲さん(文化庁、現在東京国立博物館)も参加され、地震・火山史料に関して有益な投稿をしてくださいました。これらが、私の次のステップへの重要な下地になりました。

4. エリーチェ

2002年7月にイタリアで、地球物理学国際スクールの21回目として「過去の地震の記録の研究」と題する

歴史地震学のワークショップが開かれました。前述のINGV・ミラノのStucchi所長がネットサーフィンで小山さんを見つけて声をかけてきたのを、小山さんがmushaに流してくれて、北原糸子さん・佐竹健治さんと私が手を挙げ、lecturerとして招待されました。

ヨーロッパでは1980年代末から歴史地震の国際共同研究が進んでいましたが、このワークショップはアフリカ・南北アメリカ・ロシア・極東・大洋州を含む31カ国から72名の参加者を集め、歴史地震研究分野では初の本格的国際研究集会といってよいものでした。

私は日本の進んだ歴史地震研究を紹介しようと出掛けたのですが、ヨーロッパ圏を中心に私が望んでいるような研究が組織的に進められているのを目の当たりにして、かなり衝撃を受けました。地震史料の取り扱い方、fake地震の問題、歴史研究者と地震研究者の協同作業などが、国境を越えて真剣に議論されていました(私の勉強不足もありましたが、やはり生で見聞きすると刺激が大きい)。ただし、ヨーロッパの話はカタログを作るとおしまいでつまらないが、お前さんの話は地震テクニクスに繋がっていて面白かったと私に言ってくれたフランス人もいました。

孤立した島国日本では、国内だけで内容豊富な歴史地震研究が可能だったために、「鎖国」に近い面があったように感じました。基本的な問題点や方法論は当然世界で共通していますから、この分野でも地震科学の他の分野と同様に、国際的な共同作業に加わる必要があるとあらためて痛感しました。

ワークショップはシチリア島の北西端の標高約750mの岩山の頂にある古代以来の城塞小邑・エリーチェ(Erice)の、古い僧院の内部を改造した国際会議場で開かれました。真っ青な地中海から吹き渡る風と、世界の歴史地震研究の刺激的な風に吹かれて、ややマンネリ気味の日本の歴史地震研究を活性化して国際化しなければいけないと強く感じました。

5. [古代・中世]地震・噴火史料データベース

そのためには何か核になるプロジェクトが必要だと思いました。そして、今こそ、国際的視野を加味して、既刊地震史料集の校訂とデータベース化を理学者と歴史学者の学際共同研究として始めるべきであり、それには科学研究費補助金で一定規模のプロジェクトを立ち上げるのがよからうと考えました。

この考えを小山・早川・佐竹・田良島さんに話して賛同をいただき、ご意見を伺いつつ、私としては珍しく気合いを入れて科研費の申請書を書き、何人もの

歴史学者に参加をお願いしました。幸い2003～06年度の基盤研究(A)「古代・中世の全地震史料の校訂・電子化と国際標準震度データベース構築に関する研究」が採択されました。06～07年度は、これを発展させた基盤研究(B)を続けることができました(07年度が私の現役最後)。「国際標準震度データベース」というのはヨーロッパを中心に普及しているIDP(Intensity Data Point)を考慮したのですが、これはプロトタイプを議論しただけで終わってしまいました。

メンバーは、理系が代表者の私と小山・佐竹・早川・都司嘉宣さん、歴史系は田良島さんと榎原雅治(東大史料編纂所、中世史)・笹本正治(信州大、中・近世史)・高橋昌明(神戸大、古代・中世史)・藤田明良(天理大、中世史・東アジア交流史)・矢田俊文(新潟大、中世史)の皆さん、日本語情報処理分野で安永尚志さん(国文学研究資料館、初年度のみ)・原正一郎さん(同、初年度は研究協力者)の合計13人です(所属は初年度当時)。そして、システムエンジニアの前嶋美紀さん(まえちゃんねっと)が実質的な研究協力者でした。

なお、古代・中世とした理由は、地震史料が限定されているこの時代が、私たちの理念・方法論を限られた時間に具体的成果物として示すのに手頃であることと、古代・中世の地震史料と地震像に相対的に問題が多いこと(活断層と安易にリンクされるなど)です。

こうして、古代・中世の既刊の全地震史料を吟味・選別・校訂し、高度の検索機能を付した信頼性の高い地震史料全文データベースを構築することを目指しました(「校訂」は、各種伝本を比較して最善の史料本文を求めるという厳密な意味ではなく、信頼できる刊本等と照合するというほどの意味)。当初は「精選地震史料集」を出版する案もありましたが、インターネットで公開して汎用ブラウザで利用することに絞りました。仕様の決定に際しては経験豊富な原さんの貢献が絶大で、それを具体化するには前嶋さんの的確で迅速な技術力が圧巻でした(前嶋さんが開発した暦変換ソフト「換暦」は単独で公開され、歴史学者にも愛用されています)。史料に等級を付けて校訂することは歴史学者が分担し、全体で確認しました。

理学者と歴史学者の学際共同研究を促進することも大きな目的でしたが、各年度原則4回の全体会議は有意義でした。また、イタリア・ドイツを視察したり、前述のStucchiさん・Albiniさんを招待して公開ワークショップを開いたりもしました。以前から歴史地震研究をされていた歴史家も、そうでない方々も、歴史地震への関心を(いっそう)深めてくださったと思います。

皆忙しくて、データにかなりの不備を残したまま研究期間が終わりました。しかしその後も修正を続け、2009年6月に『[古代・中世]地震・噴火史料データベース(β版)』として公開しました[<https://historical.seismology.jp/eshiryodb/>]。ただし、データベースの編集ツールで専ら私が細々と修正作業を続けていますが、まだ非常に恥ずかしいデータの乱れ等が少なくありません。私が担当だった網文も多くが未完です。

私は、05年秋頃から06年8月末まで原子力安全委員会・耐震指針検討分科会の委員の仕事が熾烈を極め、さらに07年7月の東京電力柏崎刈羽原発の地震被災、08年3月からの新潟県と同原発の委員会、11年3月の東日本大震災による東京電力福島第一原発事故と国会事故調査委員会で莫大な時間を取られ、本研究期間中全力投入できず、その後の修正作業も著しく阻害されました。これらがなければ今頃は完成していただろうと思うと非常に残念です。

地震史料は近世のものこそ全文データベース化することが強く望まれます。大変な手間と時間がかかるでしょうが、私たちの成果が参考になると思われます。なお、詳細は石橋(2005, 2009)をご参照ください。

6. おわりに

歴史上の南海トラフ巨大地震に関しては、大森房吉・今村明恒以来、多くの方々によって研究が続けられているわけですが、私は1998年頃から、史料を丁寧にみて再検討を進めています。その結果、887年仁和地震で北八ヶ岳の山体崩壊が生じ、南海地震だけでなく東海地震も起きた、1099年承徳(康和)地震は内陸地震で1096年嘉保(永長)地震が南海トラフ全域破壊型だった、1361年康安南海地震の2日前に東海地震が起きた、1605年慶長地震は小笠原海溝沿いで、南海トラフ地震は1614年(慶長十九)だった、といった新説・仮説を提案しました。

震災に関しては、よく歴史地震に学べと言われます。それはそうなのですが、近未来の南海トラフ「超広域複合大震災」は歴史上はじめての様相を呈するおそれが強く、「歴史災害からは学べない」点をこそ歴史から学ぶ(洞察する)べきではないか。このことも社会に伝えたいと思っています。詳しくは石橋(2014)を見ていただければと思います。

私は子供の頃から岡本綺堂の『半七捕物帳』(他の「捕物帳」とは違い、江戸の面影を伝える傑作)を愛読し、歌舞伎の生世話物<きぜわもの>や古典落語が好きでしたので、初期の歴史地震研究は「江戸もの」が中心

でした。しかし、古い南海トラフ地震を再検討し始めた頃から、古代・中世の面白さもわかってきました。

最近感じるのは、近世と古代・中世とでは歴史地震研究の「(主流の)スタイル」に少し違う点があるかなということです。近世、それも後期では、史料とそこから得られる情報が膨大なので、大量のデータを処理する最新技術が適用されたりします。また、一般の方にも親しみやすい史料が多いので市民と一緒に翻刻や読解をおこないやすく、新史料の発見もまだあるでしょう。それにたいして古代・中世は史料が少なく、新史料の出現もあまりなく、素人が新たに翻刻する余地も少なく、研究の中心は既存の史料をより深く読み解くことだと思います(もちろん、木簡の新発見、木簡・碑文・棟札などのデータベース化、考古遺跡・地形・地質情報などと文献史料を統合したデータベース構築といった新たな取り組みはありえます)。そして、古代・中世の地震の解釈は大森房吉や今村明恒の頃のままのものが多く、再検討を待っています。また、同じ史料でも歴史学者と地震学者では目の付け所が違ふことがあり、歴史学者に任せればよいとも言えません。

私は、歴史学の学生は暗記させられるともいわれる名著、佐藤進一『新版古文書学入門』(1997, 法政大学出版社)などを知るのが余りにも遅かったのですが、これからも勉強して、基本的な史料地震学に精進していきたいと思っています。

小文にお名前をあげなかった多くの方々からも多大なご指導・ご助力をいただいて今日までやってきました。末筆ながら皆様様に深く感謝いたします。

文献

- 石橋克彦, 1985, 歴史地震研究で感じたこと(要旨), 歴史地震, 1号, 55-58.
- 石橋克彦, 1987, 地震予知研究における歴史地震研究の現状と問題点, 地震予知研究シンポジウム(1987), 129-142.
- 石橋克彦(編著), 2005, 総特集 地震史料の校訂とデータベース化—日本の古代・中世を中心に—, 月刊地球, 27, 811-893.
- 石橋克彦, 2009, 歴史地震史料の全文データベース化, 地震2, 61, S509-S517.
- 石橋克彦, 2014, 南海トラフ巨大地震—歴史・科学・社会, 岩波書店, 262 pp.
- 石橋の歴史地震研究のページ(<https://historical.seismology.jp/ishibashi/>)で論文等の多くが閲覧できます。